

中間構文における動作主のゆくえ

熊 谷 滋 子

1. はじめに

英語には、(1)でみられるように能動態(a)と受動態(b)という表現形式をもっている。

- (1) a . Mary sells the book well.
- b . The book is sold well by Mary.

- (2) a . John cuts this bread easily.
- b . This bread is cut easily by John.

他動詞の目的語である対象(theme)を主語にもつ受動態表現があるのにもかかわらず、(3)で示すようにさらに中間構文(activo-passive, or middle constructions)と呼ばれる表現もある!

- (3) a . The book sells well.
- b . This bread cuts easily.

中間構文は、広告文等でよく見られる表現だが、受動態とどう違うのだろうか。中間構文があるということは、受動態と全く同じ意味を示すとは考えにくく、中間構文固有の意味をもつと考えられる。

今回は、次の三点について、動作主との関わりで中間構文をとらえ直してみたい。第一に、動作主の存在についてである。これまでの様々な研究において、implicit agent と呼ばれるものが中間構文に存在すると特徴付けられてきたが、その動作主はあるとすれば、いかなるものかみてみたい。第二に、(3)でもみられるが、well, easily 等の副詞が共起していることからわかるように、中間構文を副詞等の修飾関係ぬきには語れない。それらは、動作主の存在を裏付ける要素とする見方もあるが、果たしてそうだろうか。中間構文で用いられる動詞のタイプの制限と関連付けながら、動詞の特性と修飾関係の密接性を検討していきたい。最後に、日本語には、果たして英語の中間構文に相当するものがあるかという点を考えたい。特に、動作主との関わりの中で、英語と日本語と

の共通部分を探ってみよう。

以上の三点を主な論点として進めていくが、ここでは、英語の中間構文の定式化、あるいは、日本語の相当する構文の定式化を試みるというよりは、私が今まで解決しえずにきた問題点を整理することによって、英語の中間構文のもつ固有の意味をより明らかにし、それらの過程で日本語をもとらえ直していきたい。これまで中間構文についての定式化が行なわれてきたが、それらの是非を問うことを目的とはせず、それぞれの定式化の動機付けになっている証拠の不十分さ指摘することで、中間構文をとらえ直すことができると考えている²⁾。

2. 英語の中間構文の特徴

動作主の存在の有無を考える前に、これまで指摘されてきた英語の中間構文の特徴をまとめてみたい³⁾。

(1) a. 主語位置に対象(theme)をとる。

b. 動詞は、他動詞派生である。しかも、状態動詞ではなく、おもに、達成動詞 (accomplishment verbs) から派生したものである。

c. 時制は、単純現在形である。

d. 副詞等の修飾語句を伴うことが多い⁴⁾。

e. 動作主は、表面には現われないが、存在している。(implicit agent)

以上の五点を兼ね備えた中間構文は、受動態と違い、より周辺的な、特殊な構文として存在している。換言すれば、中間構文は、制限が多くあるということである。

(2) a. This poem translates easily.

b. Mary photographs well.

中間構文の特徴は、主語名詞句の特徴を行為のしやすさ、しにくさ(あるいは、行為の結果の状態)という観点から記述するというものである。(2)では、詩の特徴を訳しやすさから、メアリーの特徴を写真写りからそれぞれ記述している。その特徴は、一時的なこともあるだろうし、永続的なこともあるだろう。(1)の中間構文の特徴をまとめると、状態変化を示す動詞によって意味された動作・行為を通して(b)、主語名詞句(theme)の特徴を(a)、行為のしやすさ、しにくさ、あるいは行為の結果の状態(d)を記述することで、誰にとっても(e)、そういう特徴がみられることを示す構文である。

これらの諸特徴を概観してみても、動作主の存在という避けて通ることのでき

ない問題にあたる。受動態では、動作主を示す by-句や動作主を強く修飾する副詞 (intentionally) 等が共起できるが、中間構文では許されない。中間構文にとって、動作主はどういう働きをしているのかが大きな問題となってくる。(1 b) で示したように、中間構文で現われる動詞は全て基本的に動作主を必要とするものである。それらの動詞が中間構文に現われたときに動作主はどういう立場になるのだろうか。さらに、(1 d) との関連で、修飾語句も動作主を修飾の対象としているのかもかかわってくる。次のところで、詳しく検討したい。

3. 動作主の役割

中間構文は、受動態と違って、動作主を示す by-句、動作主を強く修飾する副詞等の表現と共起できないことは広く知られている。

- (1) a . The book is sold well by the students.
b . *The book sells well by the students.
- (2) a . The book is sold intentionally.
b . *The book sells intentionally.
- (3) a . The book is sold to help the poor countries.
b . *The book sells well to help the poor countries.

(a) は、受動態で、それぞれ文法的であるが、一方、中間構文の (b) は非文となっている。中間構文は、主語名詞句の特徴を中心に述べるものであるので、わざわざ (特定の) 動作主や動作主を修飾する副詞を示すことによって、動作主中心の記述を行なうと、構文自体の意味するものの焦点がずれてしまうということで非文を意味的に説明できるだろう。このように、何故動作主が表層上現われえないかということが、直観的に理解できても、動作主という、動詞にとって重要な要素はどうなってしまったのかということになると、一筋縄ではうまく説明がつかない。表層上は現われえないが存在しているとして提案された implicit agent の実態はなにかということである。

中間構文での動作主について、表層上は現われえないが、統語的な役割は果たしているという興味深い提案が、Stroik (1992) によってなされている。

- (4) a . Books about oneself never read poorly.
b . Potatoes usually peel easily after boiling them.
c . That book reads quickly for Mary.

(Stroik, 129-134)

(4 a) では、再帰代名詞 oneself の先行詞がないと、この文は解釈ができず、非

文となるが、実際は文法的な文なので、何らかの先行詞があるはずであるとしている。同様に、(4 b)では、after-節の行為主体の主語 PRO を制御する要素が主文に存在していなければならないとしている。Stroik の見解では、再帰代名詞 oneself の先行詞と PRO の制御要素が、いわゆる implicit agent であり、この点から、implicit agent は十分に統語的役割を果たしているとしている。さらに、(4 c)にみられるように、表層上、for という前置詞の目的語として動作主らしきものが現われうるとすると、中間構文での動作主は、全く無くなってしまったわけではなく、VP 付加部に PRO として存在し、統語的役割を果たしていると結論付けている。

中間構文での動作主の統語的役割を証明しようと試みたことは有意義であるが、しかし、よく考えてみると、統語的存在としての動作主の証明は、それ程簡単ではないということがわかってくる。Zribi-Hertz(1993)では、Stroik の主張の不備を指摘し、中間構文での動作主が、必ずしも統語的役割を担っているとはいえないことを示している。

(5) a . Books about oneself are often worrisome.

b . That book is expensive for Mary.

(Zribi-Hertz, 584-8)

(5 a)では、中間構文に限らず、一般の形容詞文でも再帰代名詞が現われていることを示し、このタイプの再帰代名詞は、必ずしも先行詞を必要としない用法(logophoric pronoun)であり、中間構文(4 a)では、このタイプが現われていることを指摘している。Stroik 流に考えれば、再帰代名詞が常に先行詞というものを必要とするならば、(5 a)もなんらかの先行詞を設定しなければ非文となってしまう。また、(5 b)のように、for-句の目的語として示されるものは、動作主というよりは、むしろ視点という解釈の方が自然であるので、(4 c)にあてはめて考えると、動作主として現われているとはいいがたい。

さらに、Stroik は、(4 b)で、after-節の制御要素(controller)が主文に存在していなければならないが、それが動作主であるとしているが。しかし、次の例を考えることにより、一概にそうとは結論付けられないものがからんでいることがわかる。

(6) a . The glass broke after pouring hot water into it.

b . The door opened after oiling it.

(6)での動詞は、いわゆる非対格動詞(unaccusative verbs)⁵と呼ばれるもので、動作主は削除されているということで見解の一致をみている動詞である。それ

なのに、after-節があっても文法的であるということは、after-節への制御関係は、必ずしも主文のみの要素によって統語的に処理するものではなく、他の要因がかかわって意味解釈されていると考えられる。

まとめると、統語的役割を担う動作主の証拠は、まだ不十分であり、さらなる検討が求められる。従って、現在のところ、動作主は、仮に存在するとしても、統語レベルにおいてではなく、あくまで意味的なレベルにおいてであると結論付けられる。換言すれば、統語的役割をもつ動作主は受動態構文までであり、中間構文にはそのような動作主は存在しないということである。しかし、動作主が存在しないとすると、非対格構文と区別つかなくなり、中間構文のもつ独自性が失われてしまうので、なんらかの形で、動作主が存在するという方向で考えていきたい。中間構文と非対格構文との区別について、賛否両論あるが、ここでは、区別する方向でとらえたい。

Fagan(1992)は、語彙レベルの規則(7)を仮定して、動作主の認可をしようとしている。

(7) Assign *arb* to the external theta-role.

ここでの外項(external theta-role)は、動作主にあたるもので、語彙レベルでそれに任意の解釈(特定せずに、誰にでも)をもたせて、統語レベルでは、何の役割も果せないとして処理している。Roberts(1985)の提案も、Faganの意見とそれ程違いはない。動作主は、外項でも内項でもないとしている。しかし、もう少し詳しく考えてみると、語彙レベルで存在するということは、どういう意味があるのだろうか。まったくの任意という意味で解釈できるのだろうか。

(8)a . This shirt washes well.

b .??People, in general,/One can wash this shirt well.

c .??This shirt can be washed well by people, in general./one.

(cf. Fellbaum : 1986)

中間構文は、総称的な(generic)な解釈がなされる傾向にあることが、これまで指摘されてきた。総称性が、もし、動作主に対しての総称性(誰にとっても)という解釈なら、(8 b, c)に明示されたような動作主が現われても文法的になるはずであるが、実際はおかしな文とされている。この点で、統語レベルでの動作主の総称性の問題ではなく、あくまで表層には生じえない、語彙レベルでの総称性ととらえるのが自然なのかもしれない。

つまり、中間構文において、純粹に意味的なものとしての動作主の存在は、表層に現われると、容認しにくいものとなるということである。例えて言えば、

動作主は、能動態では、重要な役割を担い、舞台の上で活躍しなければならないが、受動態では、少し役割が減り、いつでも登場できる状態で舞台のそでに待機している。中間構文では、もはや待機できる資格もなく、全くの裏方として存在している。

動作主の存在を支えてくれるのは、受動態では、動詞に付加する接尾辞 *en* や前置詞 *by*、動作主を強く修飾する副詞であったりするが、中間構文の場合、他動詞になんの接辞も付加しないため、動作主の存在を支えてくれるものがない。副詞等の修飾要素がその役目をするという意見もあるが、この点については後述する。ここで、接尾辞との関わりで、動詞に名詞化、形容詞化する接辞が付加した場合に、動作主の存在を支えてくれるものを考えてみたい。

- (9) a . the destruction of the city to make a point
- b . the deliberate destruction of the city
- c . The problem is observable by anyone.
- d . The island is uninhabited on purpose by man.

何らかの接辞付加により、動詞のもとももっている要素の変更・保持を明確に知らせることができる。(9)では、名詞化でも形容詞化でも接辞付加により、動詞のもっている要素の一つである動作主を保持し、表層上現われうることを示している。これに対して、中間構文は、他動詞派生だが、何の接辞も付加されずにいるため、動詞のもっている要素の変更・保持について不明瞭になっている。ただし、非対格構文の存在によって、その変更が予想もつかないことではないという見方がある。

他の言語（例えば、フランス語やスペイン語）では、中間構文に相当する構文には、接語 (*clitic*) が現われている。これは、他動詞のもっている要素の一つである動作主を吸収する役目を果たす。従って、この構文での項構造の変更が明示される。Keyser and Roeper は、このことに注目し、英語の中間構文にも抽象的な目に見えない形で接語 *si* が存在していると提案している。この提案の意図はよくわかるが、接語と共にある中間構文は、英語の中間構文と違い、意味的にも統語的にも制限が少なく、幅広く用いられているということから、この提案には無理があるように思われる。やはり、動詞のもつ項構造の変更・保持には、なんらかの形態素の付加が必要になってくると考えられる。

まとめると、英語の中間構文には、統語的役割を果たしうる動作主の存在はまだ十分に証明されていない。あくまで、語彙レベルで、動詞のもっている要素の一つとして、削除されることなく、純粹に意味的に存在している。今後の

課題として、この語彙レベルでの存在を確かめる手立てを検討していかなければならない。

4. 動作主と修飾関係

動作主は、統語レベルではなく、語彙レベルに存在すると考えてきたが、さらに考えてみたいものに、中間構文でよく現われている副詞等の修飾要素との関連である。まず初めに、共起している副詞が中間構文における動作主の存在を支えるものであるとの提案は、必ずしもあてはまらないということを指摘したい。中間構文に現われうる副詞は、動作主を修飾する様態の副詞(manner adverbs)とされているが、下の例でそうではないということがわかる。

- (1) a . John washes silk shirts well.
- b . Silk shirts are washed well.
- c . Silk shirts wash well.

(1 a)の能動態において、副詞 well は、動作主 John を修飾し、John が絹のシャツを上手に洗うという意味をもつが、一方(1 c)の中間構文においての well は、洗いがきく、洗っても大丈夫という意味で対象 silk shirts を修飾しているのであって、動作主を修飾しているわけではない。この点で、中間構文に現われる副詞を様態の副詞ではなく、容易さの副詞(facility adverbs)としている研究もある⁸⁾。

また、中間構文において、動詞は状態性を帯びていると指摘されてきた。状態性をチェックする方法として、従来提案されてきたものに、命令形や進行形になれない、特定の時点を示すものとは共起できない等がある。

- (2) a . *Know the answer !
- b . *I am knowing the answer.
- c . *I knew the answer yesterday.

これらを中間構文にあてはめてみよう。

- (3) a . *Drive easily, car !
- b . The car is driving easily.
- c . The car drove easily yesterday.

命令形については、状態動詞と同様に非文となっているが、進行形や、特定の過去の時点を示すものとの共起も文法的であるという点で、完全な状態性を帯びているのではなく、元の他動詞の状態変化の意味をある程度保持していると推測できる⁹⁾。

まとめると、中間構文での副詞の役割は、動作主の存在を支えるものとは言いきれないし、状態性になじむものでもない。この点でも、動作主の存在が統語レベルのものではないにせよ、語彙レベルでどのような役割を担っているかが、依然として未解決である。

第二に中間構文では、非対格構文と違い、副詞等の修飾関係が、何故必要なのかという点があげられる。(4b)示されているように、修飾語句がなくても、語用論的に有意義な情報がありこまれていれば、主語名詞句の特徴を示している限りにおいて、文法的となる。

(4) a . *The meat cuts.

b . The meat slices.

(4)では、肉は切れるのが当然であるということが前提となっている社会において、(a)の文によってなんら肉の有意義な特徴は述べられていないが、(b)のように、薄く切れるということで肉の特徴として意味のあることならば、なんら修飾語句がなくても、文法的である。記述された特徴として、有意義なものを担っていれば、動詞だけでも十分であろうが、一般的な傾向として、修飾語句がないと非文になることが多い。

(5) a . The door opened.

b . *The book read.

この点に関連して、Grimshaw and Vikner (1991)が、達成動詞 (accomplishment verbs) 中の何かを作り出す動詞の特徴として、受動態になると、なんらかの修飾要素が、必須要素になるということを指摘している。

(6) a . The house was built * (by a famous carpenter/in ten days/
only with difficulty).

b . The house was destroyed.

(6a)での動詞 build が受動態の場合、カッコ内の修飾要素がないと非文となる。一方、(6b)は、そのようなものがなくても、文法的である。これは、なにかを生み出す、作り出す動詞の場合に、修飾語句がない場合、例えば(6a)で、家が建てられたということは当然のことで、前述したように、何ら有意義な情報を述べていないと思われる。この言語事実を説明するために、Grimshaw and Vikner は、達成動詞が受動態になっても、(7)のような出来事構造を保持していると考え、STATE は動詞で同定 (identify) されているが、PROCESS の方は修飾要素で同定されなければならないと結論付けている。

(7) [event [PROCESS] [STATE]]

達成動詞の場合、達成された結果の状態は、修飾要素がなくても同定されるが、達成の過程 (PROCESS) は、修飾要素によってしか同定されえない。

このことを中間構文にもあてはめて考えてみたい。

(8) a . *The book reads.

b . *The song sings.

達成動詞の受動態と同じように、(8)では、本が読めることや、歌が歌えるということは、本や歌の特徴として何ら有意義な情報を述べていない。前述したように、中間構文での動詞は達成動詞に限られている。Grimshaw and Vikner の提案にそって、中間構文でも動詞は(7)の出来事構造を保持しているとする。先の議論で指摘したように、動詞が完全に状態性を帯びていないことも合致している。しかし、ここで、中間構文の場合は、受動態と違って、PROCESS か STATE (result) かどちらか一方を修飾することによって、主語名詞句の特徴を記述することができる。

(9) a . The shirt washes easily.

b . The shirt washes well.

副詞は、(9 a)では、洗いやすい、簡単に洗えるという洗う過程 (PROCESS) を修飾し、(9 b)では、洗いがきく、洗っても型くずれしないという行為の結果の状態 (result STATE) を修飾していると考えられる。どちらか一方を修飾することにより、主語の特徴を示す構文として有意義な情報を述べており、その限りにおいて文法的となる。

動詞の制限について、中間構文で許される動詞は、基本的に状態変化を意味するものということは、納得できる。行為のしやすさ、しにくさや行為の結果の状態という観点からの主語名詞句の特徴を記述する構文であるから、状態動詞のように、行為の区切りのはっきりしないものは許されない。しかし、状態変化を伴うものでも、win, climb といった到達動詞 (achievement verbs) が許されないのは何故だろうか?

(10) a . *The game wins easily.

b . *Mt. Fuji does not climb easily.

この点について考えられるのは、第一に、先にあげた達成動詞の出来事構造にみられる PROCESS という概念が、到達動詞の場合、欠けているのではないかということである。到達動詞は、瞬時にその動詞の意味する行為を終える。動作の行為自体の時間的幅があまり感じられない。

(11) a . *How long did John win the game?

b. How long did John wash the shirt?

時間的幅をもたせた質問（どのくらいの間していたか）が、到達動詞の場合受け入れられない。進行形についても、意味の差がある。

(12) a. John is winning the game.

b. John is washing the shirt.

(12 a)の場合、試合で勝ちそうだとことを意味しているのであり、試合に勝つ動作をしているわけではない。(12 b)の場合、シャツを洗うという行為が進行中であり、今、洗う動作をしているのである。中間構文では、前述したように、進行形になれるものもあり、その際、副詞の修飾は進行中の動作に対するしやすさ、しにくさを示している。従って、到達動詞の場合、動作のしやすさ、しにくさを示すある程度の動作の継続性（瞬時にして動作が完結するのではないという意味において）が感じられないので、行為自体の PROCESS への修飾ができないためであろう。

第二に、中間構文の文法性は、*affectedness* という概念から説明がなされてきた。つまり、主語名詞句が動詞によって示される行為によって、何らかの状態変化をこうむった場合、中間構文として容認されるという説明である。確かに、対象は到達動詞 (*win, climb*) よりも達成動詞 (*cut, cook*) のほうが、動詞の行為によって変化をこうむる程度が大きいかもしれない。しかし、(13)にみられるように、達成動詞でも影響をこうむったとは感じられないものもあるので、決定的な概念とは言いがたい。

(13) a. The book reads easily.

b. The song sings beautifully.

(13)において、主語名詞句の *the book* や *the song* が動作の結果、何らかの影響をこうむったとは考えにくい。しかし、ここで主語名詞句に焦点をあて、その特徴を記述するものが中間構文の独自性であると考えれば、到達動詞は、むしろ動作主の方に、より焦点をあてた意味をもつ、動作主指向性の強い動詞であるとする、中間構文になじまないということが納得できる。受動態にしてみると、よくわかる。

(14) a. The game was won * (by John).

b. Mt. Fuji is climbed * (even by patients).

文脈の助けなしでは、動作主によって修飾されないと文として不完全になっている。

以上、中間構文において到達動詞が用いられない理由をまとめてみると、行

為が瞬時にして完結してしまうこと、また、対象(theme)よりも動作主の方により焦点をあてた動詞であると考えられるので、対象(theme)に焦点をおき、時間的幅をもつ継続的な動作の過程(PROCESS)を修飾するすることによって、対象の特徴を述べる中間構文にはなじまないと考えられる。

5. 日本語と中間構文

これまでずっと、英語の中間構文のみを考察してきたが、ここでは日本語にも英語の中間構文に相当するものがあるかどうかを検討してみたい。

英語の中間構文においてのように、他動詞派生の自動詞で、何ら形態素(接辞)が付加していないという条件で相当するものを探してみると、日本語には対応するものがないと結論付けられる。日本語では、自動詞と他動詞は形態上の区別があり、全く同じというものはわずかしか見あたらない。(例えば、ひらく、とじる) 従って、「この本は簡単に訳す」と言えないのは自他の形態上の区別のある日本語の特徴を反映していると思われる。しかし、ロマンス諸語のように、他動詞になんらかの形態素、あるいはそれに類するもの(接語)の付加によって、主語に対象(theme)をとり、その特徴を行為のしやすさ、しにくさという観点から記述するものに範囲をひろげ、日本語においても(自他の区別はあるにせよ)、他動詞派生の自動詞で主語に対象(theme)をとり、その特徴を述べる構文を見てみたい。影山、井上、寺村等の研究成果をふまえ、他動詞に接辞の付加によって作られた自動詞文を考察の対象としていく!⁹

いくつか日本語の-e/-ar型自動詞文をあげてみよう!¹¹

- (1) a. この木は、簡単にまがる。
b. 会費はすぐに集まる。
- (2) a. この糸はなかなか切れない。
b. この高価な時計は、簡単には割れない。
- (3) a. 今、話題の本は、たちまち売れる。
b. このワインは、飲める。

日本語の場合、フランス諸語の接語のように、他動詞に接尾辞-e/-arが付加しているため、動詞の項構造の保持や変更が明確なため、英語の中間構文のような制限はあまりなく、幅広く使われる。単純過去時制で、修飾語句なしでも、十分に文法的である。

- (4) a. *This wine drank.
b. このワインは飲めた。

(5) a . *This thread cut.

b . この糸は切れた。

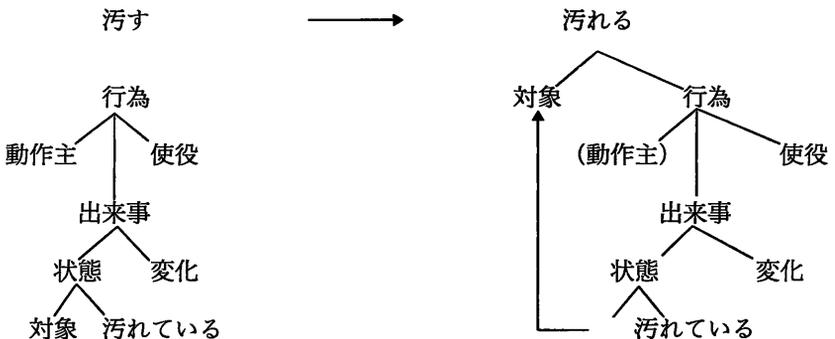
例えば、(5 b)において、主語名詞句「この糸」の特徴というよりは、「切れた」という出来事を記述している。この点で、日本語の-e/-ar 自動詞は、英語の非対格動詞(unaccusative)との共通点をもっている。2 節(1)でみた、英語の中間構文の特徴を日本語にもあてはめてみよう。

| (6) 特徴 | 中間 | -e/-ar 型 | 非対格 |
|-------------------|----|----------|-----|
| a . 対象が主語 | 0 | 0 | 0 |
| b . 他動詞派生 | 0 | 0 | * |
| c . 単純現在時制 | 0 | * | * |
| d . 修飾語句 | 0 | * | * |
| e . 動作主(implicit) | 0 | 0 / * | * |

寺村(1982)が、受動的可能表現(passive potential)という名付けたものが、この-e/-ar 自動詞構文にあてはまる。²

さらに、興味深い提案として、影山(1991)は、自動詞化の過程に際して、-e 型と-ar 型は違った操作がなされるとしている。つまり、-e 型は内項の外項化によって、-ar 型は外項の削除によって形成されるものとしている。概念構造として、以下のように、提示している。

(7) -e 型



ここで注目すべきは、動作主の存在である。影山の提案した概念構造からいえることは、-ar 型には、動作主は存在せず、-e 型には、残っているということである。その動機付けとして、複合語から十分な証拠があげられている。さらに、影山は、「難なく」という動作主の存在を前提とする副詞との共起制限を指

(13)

| | 英語 | 受動文 | 中間 | | 非対格 |
|-----------------|-----|-------|----|------|-------|
| 共起可能性 | 日本語 | -rare | | -e 型 | -ar 型 |
| ● by-句 | | 0 | * | * | * |
| ● intentionally | | 0 | * | * | * |
| ● easily | | 0 | 0 | 0 | 0 |
| ● 修飾語句の 義務性 | | * | 0 | * | * |

表(13)からわかるように、日本語の-e/ar 型自動詞文は、英語の中間構文と非対格構文の特徴を兼ね備えている。共通点として、もともとの動作主は完全には削除されず、動詞の概念構造に残され、純粋に意味的役割を担うものとして存在している。

6. 結 論

ここでは、英語の中間構文での関心の的の一つである動作主の存在の意味を共起関係や修飾関係から、問題点をより明確にしようとした。少なくとも、それが統語的役割を担う程までの動機付けは与えられないので、動詞の概念構造にある純粋に意味的存在としての役割をもつものとした。日本語との関連では、自動詞化の-e/-ar 型構文を動作主との共起関係や副詞等の修飾関係から、共通部分を指摘した。最後に、依然として、動作主の役割を、統語的ではないとしても、なんらかの役割を担っているとして、果たしてどのようなものなのかという根本的な問題は未解決であるので、今後は、より広範囲で新しいデータを分析していく必要があると考えられる。

注：

1. 荒木・宇賀治(1984)よれば、歴史的には、受動態表現は15世紀に現われ、16世紀に確立し、中間構文は16世紀頃から現われたと分析している。やはり、構文的にも、後者が前者より、より特殊であることがうかがえる。
2. 主に、Keyser and Roeper(1984)の名詞句移動による統語的解決と、Fagan(1986)の語彙規則の適用による語彙的解釈があげられる。
3. Keyser and Roeper, Roberts, Fagan, Fellbaum 等の研究を参照されたい。

4. ここでは、修飾語句として、形容詞、否定辞、助動詞も含めている。
5. 用語上の問題がある。Keyser and Roeper(1984)では、ergative と称しているものがあるが、適切かどうかについて、見解の一致をみていない。ここでは、英語という言語を記述する際に使用される unaccusative という方を採用する。
6. この関係をわかりやすく表にまとめてみよう。

動作主の役割

| | | | |
|----------|---------|----------|-----------|
| 主語 | by の目的語 | 動作主修飾副詞 | 容易さの副詞・道具 |
| argument | adjunct | | |
| 能動態 | 受動態 | 動作主無し受動態 | 中間構文 |
| ←統語的役割→ | | | 意味的役割→ |

7. 時制と総称性の関係も指摘されている。2節で示した中間構文の特徴(1c)は、主語名詞句の永続的な性質、属性(property)を担うものとして重要であるとされている。つまり、総称性は、時に関して、性質が変わらないものとして記述するものとしている。実際には、このことがきれいに当てはまらない。

- (i) The guitar used to play well.
- (ii) The book was selling well.
- (iii) The oyster killed well.

上の文は、時制から考えると、全て過去の一時点を示している。時制の制限(単純現在)を守らなくとも、中間構文として十分通用する文である。

8. Fellbaum(1985)を参照されたい。
9. この疑問は、川崎典子さんの指摘による。
10. 奥津(1967)等を踏襲して、日本語の動詞としては、自動化、他動化、両極化(その他)の三種類のタイプにまとめられると考える。
11. 影山の例を参考にした。
12. 寺村(1982)を参照されたい。
13. 中右(1991)等を参照されたい。

参考文献

阿部泰明(1991)「この本はよく売れる」中間構文に関する一考察」『言語理論と日本語教育の相互活性化』津田日本語教育センター 76-89。
 荒木一雄・宇賀治正朋(1984)『英語史 IIIA』大修館書店
 Condoravdi, C. (1989) "The Middle: where semantics and morphology meet", *MIT Working Papers in Linguistics*. vol.11. 16-30.

- Dixon, R. (1991) *A New Approach to English Grammar on Semantic Principles*. Oxford University Press.
- Fagan, S. (1986) "The English Middle", *Linguistic Inquiry*. 181-203.
- Fagan, S. (1992) *The Syntax and Semantics of Middle Constructions*. Cambridge University Press.
- Fellbaum, C. (1985) "Adverbs in Agentless Actives and Passives", *Chicago Linguistics Society*. 21-31.
- Fellbaum, C. (1986) *On the Middle Construction in English*. Indiana University Linguistics Club.
- Fellbaum, C and A. Zribi-Hertz (1989) *The Middle Construction in French and English* Indiana University Linguistics Club.
- Grimshaw, J. and S. Vikner (1991) "Obligatory Adjuncts and the Structure of Events", ms.
- Hale, K. and J. Keyser (1986) "Some Transitivity Alternations in English", *MIT Working Papers*. 1-41.
- 井上和子(1986) "On the implicit agent in Japanese", *NTT Report*. 26-36.
- 井上和子(1992) 「On Middles」平成3年度科学研究費補助金成果報告書。1-19.
- 影山太郎(1991)「統語構造と語彙構造のヴォイス変換」『言語理論と日本語教育の相互活性化』津田日本語教育センター。45-58.
- Keyser, J. and T. Roeper. (1984) "On the middle and ergative constructions in English", *Linguistic Inquiry*. 381-416.
- 松瀬育子(1992)「中間構文：Cognitive Approach」関西言語学会ワークショップ。
- 中右実(1991)「中間態と自発態」『日本語学』明治書院 52-64.
- Ohara, J. (1993) "On middle constructions in English and Spanish", 『言語文化研究』静岡県立大学大学院言語学研究室。
- 奥津敬一郎(1967)「自動化、他動化および両極化転形」『国語学』70。46-66.
- 大庭幸男(1993)「英語の中間構文について」『英語青年』20-22.
- Rizzi, R. (1986) "Null Object in Italian and the Theory of pro". *Linguistic Inquiry*. 501-57.
- Roberts, I. (1985) *The Representation of Implicit and Dethematized Subjects*. PhD Dissertation. University of Southern California.
- Sato, C. (1982) "Some Properties of Inanimate Subject Passives", *Papers in*

Japanese Linguistics. Kaitakusha. 177-91.

Stroik, T. (1992) "Middles and Movements", *Linguistic Inquiry*. 127-37.

寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版

梅田亨(1989)「状態性と中間態形成」『外国語論集』大阪学院大学外国語学会
42-63.

Van Oosten, J. (1977) "Subjects and Agenthood in English", *Chicago Linguistics Society*. 459-71.

Zribi-Hertz, A. (1993) "On Stroik's Analysis of English Middle Constructions", *Linguistic Inquiry*. 538-89.

Zubizarreta, M. (1987) *Levels of Representation in the Lexicon and in the Syntax*. Foris Publications.